

山本 学人（72期）

私は、2020年の1月から、タックスチームの一員としてDLA Piperで働いています。DLA Piperへの入所を希望した理由は、世界中に拠点を有する法律事務所の一員として国際的な仕事に携わりたかったことや、もともと興味があった税務分野の案件に携わりたいと考えたためです。入所後は、日々、世界中のクライアントの案件を、国内外の弁護士と協力しながら担当させていただいており、また、多くの税務案件にも関与させていただいており、非常に充実した毎日を送っています。



担当するほとんどの案件では、日本人同士の会話等を除き、英語が使用されています。このため、日々の業務の積み重ねや、事務所内での外国人弁護士とのやり取り、海外オフィスとの交流を通じて、着実に英語スキルは向上していきます。さらに、DLA Piperでは自主的に取り組んだ英語の教材に対して補助金が助成されるなどの制度も整っています。

私はタックスチームに所属しており、入所時の希望通り多くの税務案件を担当させていただいていますが、それ以外にも、M&A、コーポレート、不動産、労務、規制法、訴訟など、様々な分野の業務に携わる機会をいただいております。自分の知識や能力を多角的に伸ばす環境に恵まれていると感じています。DLA Piperは、世界中に多くのクライアントを抱えており、多種多様な案件を取り扱っていますが、東京オフィス自体は弁護士25名程度と少数精鋭でそれらの案件に対応しているため、若手のうちから様々な分野の案件に関与させていただけるという点は非常に魅力的であると思います。

職場はとてもアットホームな雰囲気です。毎年のクリスマスパーティーや、事務所旅行など、イベントも充実しています。パートナーやアソシエイトの先輩方も気さくな方ばかりで、案件で行き詰ったときには、丁寧に相談に乗ってもらえています。また、DLA Piperには、仕事と家庭の両立も含め、多様な働き方を実現している弁護士が多く、最近お子さんが生まれたばかりの先輩弁護士は、在宅勤務と有給などをうまく利用されて、仕事とご家庭での時間を柔軟に調整されています。そのような先輩方と共に働き、お話を聞けることは、自身の将来のキャリアプランやライフプランを考える上で大きな学びになっていると感じています。

国際的な業務に興味があり、様々な分野の案件に挑戦したいと考えている方にとって、DLA Piper は最適な職場といえると思います。興味を持って下さった方は、ぜひ説明会にご参加いただき、DLA Piper について話を聞いてみてください。

内田 朱音 (73期)

私は、2021年の1月から、Employment（雇用・労働法関係）チームの一員としてDLA Piperで働いています。主な業務は、Employmentという名のとおり、就業規則や雇用契約書のレビュー、ハラスメント防止トレーニングの実施、労使間の紛争に関する使用者側からの相談対応などがメインですが、他のチームと協働する機会もとても多いです。例えば、



事業譲渡や吸収分割・合併等に伴うデューデリジェンスでは、コーポレートチームと連携してレポートの作成に取り組みますし、従業員に支給する給与や退職金に関して税務上の問題が生じれば、タックスチームのアドバイスを求め、クライアントにとって最良のオプションを検討します。DLA Piperでは、こうしたチームの垣根を超えた案件に関わる機会が多いので、自分の所属するチームの先生方はもちろん、他のチームの先生方ともたくさんコミュニケーションを取ることができ、チームの専門分野に限られない幅広い知識を得られます。

また、お仕事で使用する書類などは、基本的にすべてデータ化されたものを、所内で活用しているデータ共有システムで保存・管理しています。そのため、急な用事でオフィスに出勤することが難しくなった場合でも、柔軟に在宅勤務に切り替えることができ、自分に合ったワークスタイルで働くことが可能です。重要なファイルを家に持って帰ったまま忘れてしまう、機密情報が含まれている書類を紛失してしまう…などといった心配も一切ありません。

DLA Piperに入って特に仕事がしやすいと感じたのは、「業務において性別は関係がない」という公平な考え方が、事務所全体の共通認識としてあるところです。現在、東京オ

フィスには、私を含め、女性弁護士が各チームに満遍なく所属しています。海外の DLA Piper オフィスにも、若手アソシエイトからパートナーまで、たくさんの女性弁護士が幅広くいらっしゃり、オフィスやチームによっては女性の方が多いところもあるほど、本当に数多くの女性弁護士が活躍している様子が身近に感じられます。日本では、法曹界、特に弁護士業界における女性の割合が 20%を切っている、などといったニュースを見聞しますが、この事務所で働く中で、「自分は少数派の人間だ」と感じるような場面は一切ありませんし、ジェンダーフリーな環境で働くことができていると自覚しています。

外資系の事務所と聞くと、「帰国子女のようなハイレベルな語学スキルがないと、日常会話にすらついていけないのではないか」というイメージがある方もいらっしゃるかと思います。ただ、少なくとも私が DLA Piper で 1 年以上働いてきた感覚としては、必ずしも入所前から英語を完璧に使いこなせる状態である必要はない、と考えています。たしかに、業務に関する連絡やクライアントとのコミュニケーションはほとんど英語で行われるため、「英語なんて大嫌いだ、見たくもない」という方には不向きかもしれません。しかし、リスニング、スピーキング、ライティングのどれをとっても、場数を踏むうちにどんどん慣れていき、たとえ苦手意識があっても時間経過とともにみるみる薄れていきます。また、所内には英語を第一言語とする方も多くいらっしゃるので、細かな表現やニュアンスの伝え方について、気軽に相談することができます。英語のスキルを磨きたいという気持ちさえあれば、多少の不安があっても臆せず飛び込める環境だと思います。

ご自身のスキルを高めたい方、自分の得意分野を生かしつつ幅広い法律知識を得たい方は、ぜひ一度 DLA Piper の事務所案内や説明会に足を運んでみてください。あなたと一緒に働ける日を心待ちにしています。